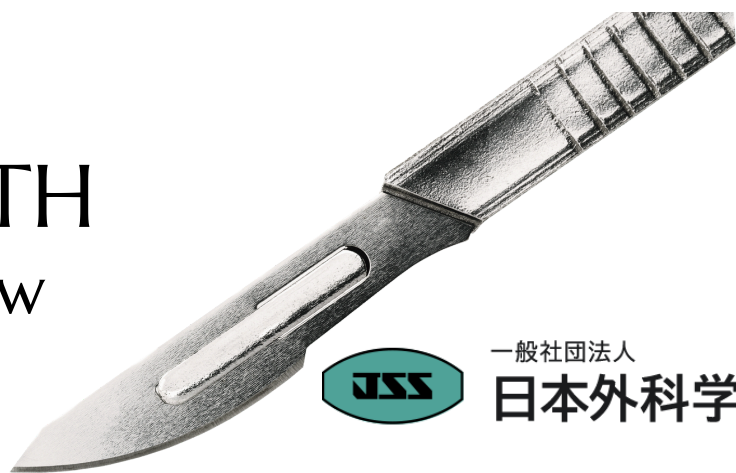


BUILD YOUR PATH

Role Model Interview



木村 祐輔 先生 緩和ケア医

PART 1 : BUILD 「あなたは何を築いてきましたか？」

Q1. まずは、現在の肩書や主な診療・研究分野について教えてくださいませんか？

現在は岩手医科大学医学部緩和医療学科の教授として、大学における緩和ケアの臨床、教育、研究を主導する立場を務めています。

長年、食道外科医として手術や周術期管理に心血を注いできましたが、2014年にメスを置き、緩和ケア専従へ転換しました。現在、当科は私を含めて3名の消化器外科出身の医師で構成されており、2019年に開設した25床の緩和ケア病棟と緩和ケアチームを合わせ、日々およそ40名の患者さんに対応しています。がん治療医としての背景を持つからこそ、各診療科の医師からの深い信頼を感じながら連携を行っています。

Q2. 医学生や研修医の頃は、どのような医師になりたいと思っていらっしゃいましたか？

当時の岩手県には、いわゆる「無医村」と呼ばれる地域が数多くありました。私はそうした地域に赴き、住民の方々の健康と暮らしを丸ごと支えられる医師になりたいと考えていたんです。

そのためには、一つの臓器や単一の疾患だけを見るのではなく、幅広い知識と技術を身につけて、患者さんの「全身」を診ることができる医師になる必要があると強く感じていました。

Q3. 数ある診療科の中で「外科」を選ばれた決め手は何だったのでしょうか？

大学6年の時の臨床実習で、外科の食道グループに配属されたことが最大のきっかけです。

手術のスケールの大きさとダイナミックさ、一方で術後管理に求められる極めて繊細な配慮、そして多職種が連携するチームワークの重要性に感動しました。何より、重い病を抱えた患者さんやご家族

に向けられる外科医たちの温かな視線に深く胸を打たれ、「自分が目指すべき道はここだ」と確信したんです。

Q4. 若い頃に思い描いていたキャリアと比べると、現在はどのくらい一致していますか？

ほぼその通りだと感じています。

かつては食道外科医として手術手技や全身管理の修練にすべてを捧げており、現在はメスを置いたことで日常の景色は大きく変わりました。しかし、患者さんの全身を診て、その人の暮らしや人生を丸ごと支えようとする現在の仕事は、学生時代に無医村や地域医療を志して思い描いていた医師像と、根本のところで実は驚くほど重なっているんです。外科で培った経験は失われることなく、すべて今の仕事の基盤になっています。

PART 2：PATH「あなたの歩んできた道」

Q1. これまでのキャリアの中で、どのような分岐点（PATH）があって現在の専門性に繋がったのでしょうか？

私のキャリアは大きく4つの時期に分けられます。

まず20代後半は、大学院で博士号を取得後、地域の中核病院で外科診療のみならず救急や健診・保健業務まで広く携わり、地域医療の土台を固めた時期です。

次に30代に入って大学に戻り、食道外科医として歩み始めました。当時は数年間ほとんど執刀のチャンスがなく、「自分は本当に外科医なのだろうか」とアイデンティティに悶々と悩む日々が続きました。それでも目の前の術後管理や集学的治療に愚直に向き合い続けました。

そして、38歳の時に食道グループを牽引する立場になりました。

また、同時期に、外科医として多くの患者さんを診る中で、治癒に至らない患者さんの苦痛やご家族の深い悲しみに十分応え切れていない葛藤を抱くようになり、院内の緩和ケアを兼任し始めました。

Q2. 緩和ケアを専門とされて、心から「この道を選んで良かった」と思う瞬間はどんな時ですか？

かつて外科医として多くの患者さんを看取ってきた際、当時の自分には苦痛を徹底的に和らげる知識や技術が足りず、患者さんに強い苦しみの中で最期を過ごさせてしまった苦い記憶が、今も鮮明に残っています。

現在は、病の進行とともに人生を閉じる時期を迎えた方に、以前よりも苦しみを和らげ、穏やかな時間を届ける力を身につけることができました。患者さんが安らかに旅立たれ、ご家族が深い悲しみの中にありながらも「その人らしい最期」を受け止められている姿に立ち会えた時、この道に身を置いて良かったと心から実感します。かつて十分に支えられなかった患者さんへの申し訳なさや愛おしさが、今の私の原点であり原動力です。

Q3. 外科専門医の取得や若手時代の外科研修は、現在の診療にどのように生きていますか？

外科での修練は、現在の緩和ケア診療の「最強の基盤」になっています。

患者さんの病態を全身的に理解する力、今後起こりうる変化を先回りして予測する力、急変時の対応力は、すべて外科の臨床で養われたものです。また、超音波検査やドレナージ、確実な静脈路確保といった手技も、症状緩和の現場でダイレクトに役立っています。

さらに外科では、一人で診療を完結することはできず、手術室やICU、病棟の多職種とチームで進める文化が身につきます。このチーム医療の感覚と「責任を引き受ける姿勢」があるからこそ、各診療科の主治医からも信頼され、がん治療と緩和ケアをスムーズに繋ぐ役割を果たせているのだと感じます。

PART 3：NEXT PATH「これから歩く人へ」

Q1. もし今、ご自身が医学生や研修医時代に戻れるとしたら、当時の自分にどんな言葉をかけてあげたいですか？

「大丈夫。患者さんの全身を診たい、その人を丸ごと支えられる医師になりたいという君の思いは、この道で必ず叶えられるから安心して進みなさい」と言ってあげたいですね。

若い頃は、いま目の前でやっている経験が将来どう繋がっていくのか見えなくて不安になることもあります。でも、目の前の患者さんや仕事に懸命に向き合った経験は一つも無駄にはならず、形を変えて必ず将来の自分を助ける力になります、と伝えたいです。

Q2. 最後に、外科を目指すか迷っている若い先生方へメッセージをお願いします！

私自身、外科医として第一線で執刀する傍ら、栄養サポートチーム（NST）や院内感染対策チーム（ICT）に所属し、やがて緩和ケアを専従で担うようになりました。

実はこれは私に限ったことではなく、全国の多くの医療現場で、外科医出身の先生方が診療科の枠を超えた横断的チームのリーダーとして医療全体を力強く牽引されています。

なぜ外科医がこれほど多角的な分野で中心的な役割を果たせるのか。それは、外科での重層的な研鑽を通じて「患者さんの全身を的確に診る知識と技術」「病状の変化を先回りして予測し瞬時に判断する力」、そして「多職種チームをまとめて前へ進める文化」が、無意識のうちにしっかりと身体に染み込んでいくからなんです。

もちろん、そうした幅広くタフな力を身につけるプロセスは決して簡単ではありません。ですが、どうか安心してください。外科医としてキャリアをスタートさせることは、自分の将来を一つの領域だけに限定してしまうことでは決してありません。むしろ、自分が望むあらゆる未来へ繋がっていく「最高の切符」を手にするのだと確信しています。

手術を極めてTop Surgeonを目指す道もあれば、研究や教育の世界で第一線を走る道もある。地域医療の現場で住民の暮らしを支える道もあれば、私のように緩和ケアの領域を切り拓いていく道もあり

ます。外科で鍛え上げられた経験と責任感は、将来どんな道に進んだとしてもあなたを支える最強の武器になりますから、ぜひ自信を持って外科医への一歩を踏み出してください！